後援：西宮市、尼崎市

上映&トークイベント開催

神戸女学院大学 ジェンダーインスティチュート主催








島田陽磨『ちょっと北朝鮮まで行ってくるけん。』『生きて、生きて、生きろ。』
× 日本電波ニュース社『荒野に希望の灯をともす』

父と家族とわたしのこと

撮影・監督・制作　島田陽磨

編集・撮影　鈴木馨｜撮影　井上 耀介　熊谷裕達｜オンラインエディター　中田勇一郎｜助監督 吉井愛海｜音楽　渡邊崇｜音楽助手　中原実優｜効果・整音　高木創｜協力　PTSDの日本兵家族会

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（映画創造活動支援事業）独立行政法人日本芸術文化振興会｜製作・配給　日本電波ニュース社｜2026年／日本／カラー／127分／ドキュメンタリー

先着100名様
参加無料
申込要

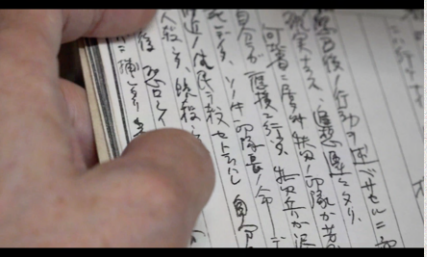
2026 11.22（日）

12:00-15:35
（開場11:30～/途中休憩あり）

会場 尼崎市女性センター・トレピエホール

上映後トーク：信田さよ子氏（公認心理師・臨床心理士）








語られなかった戦争の傷

生きづらさの、こたえを求めて

INTRODUCTION

大阪市で喫茶店を営む藤岡美千代。幼い頃、父から激しい虐待を受けて育った。10歳の時にその父が自死したと聞き、思わず万歳してしまうほどだった。だが成長後、彼女自身もまた、娘を虐待してしまうという苦悩を抱えることになる。

神奈川県でタクシー運転手をする市原和彦。幼少期、父が母に浴びせた「この淫売女が」という罵声は、今も消えない傷として胸に刻まれている。40代で結婚するが、妻に暴力を振るっていたことを死別した今も悔い続けている。

シングルマザーの佐藤ゆな（仮名）もまた、幼少期の虐待により複雑性PTSD（心的外傷後ストレス障害）を抱え、娘との向き合い方に迷い続けている。新興宗教に傾倒した母からの過剰な支配は、今も彼女の心を締めつけている。

三人が抱える「生きづらさ」は、どこから来たのか。

取材を進めるなかで浮かび上がったのは、彼らの父や祖父が、いずれも戦争に従軍していたという共通点だった―。

子どもたちは、親をたどる

近年、帰還兵の多くが深刻なPTSDを抱えていた事実が、ようやく明らかになりつつある。癒やされなかった心の傷は、DVや依存症という形で子や孫へと受け継がれることがあり、肉親間の断絶を引き起こすこともある。その連鎖を、いかにして断ち切ることができるのか。

本作でこのテーマに挑んだのは、『ちょっと北朝鮮までいってくるけん。』『生きて、生きて、生きろ。』を手がけてきた島田陽磨（日本電波ニュース社）。戦争や国家分断という巨大な力に翻弄されながらも、自らの足で立とうとする〈個人〉を記録してきた監督と、戦後日本の現実を記録し続けてきた日本電波ニュース社が、戦後80年の節目に、受け継がれた痛みと向き合う人々の姿を静かに見つめる。

公式サイトはこちら

※プライバシー保護のため、一部の顔および音声にAI加工を施しています。

(C) Nihon Denpa News Co., LTD.



上映後トーク　信田さよ子 氏（公認心理師・臨床心理士）

１９４６年生まれ。お茶の水女子大学大学院修士課程修了後、駒木野病院勤務等を経て1995年原宿カウンセリングセンター設立。さまざまな依存症の本人とその家族、DV、子ども虐待、ハラスメントや性暴力の加害者・被害者などのカウンセリングを行ってきた。現在、原宿カウンセリングセンター顧問、日本公認心理師協会相談役、日本臨床心理士会理事、NPO法人RRP研究会代表理事などをつとめる。
著書に「アディクションアプローチ」「DVと虐待」「母が重くてたまらない」「家族と国家は共謀する」「なぜ人は自分を責めてしまうのか」など多数。最新著は「溺れながら生きる、依存とケアのあいだで」文藝春秋。

＜主催・問合せ＞
神戸女学院大学
ジェンダーインスティチュート
電話：0798-51-8545
E-mail：wsi-o@mail.kobe-c.ac.jp

お申し込みはこちらから ▶▶▶
＜申込フォームURL＞
https://forms.gle/Tu6eLCbQoHXgFXGu5
申込締切：11月18日(水)